

第7章 古墳出土の埴輪と初期須恵器

一瀬和夫 (大阪府教育委員会)

1. 古墳共伴資料としての初期須恵器

小阪遺跡ではそれほど一般化する以前の須恵器が多く出土している。それらには従来、認識されていない器種や必ずしも定型化していないもの、土師器の形態と類似するものなどがある。

こうした一群の須恵器はいわゆる初期須恵器としてとらえられるもので、器種はバラエティーに富んでいる。これらは須恵器の生産体制が大規模化し、一定の器種組成とそれぞれが系列化して認識できるようになる以前の段階のものとして位置づけることが可能なものが多い。

小阪遺跡のものと同様な性格をもった近在する大庭寺遺跡の集落・窯出土資料¹⁾やT K 73、T K 85、T K 87、T K 305、T K 306、T K 216号窯²⁾などの出土資料がまず問題となる。この近在、類似するより直接的な初期須恵器資料の比較、検討は言うまでもない。しかし、これらをもってしても集団、地域差、時間差の評価が分類目的によって様々に展開する場合が多く、T K 73型式といわれるものの前後の資料をどう解釈するのかによっては新旧の関係が逆転する可能性を多分に残している。特にT K 73型式の前段階に重複性のある類似した、しかもまとまった資料が他地域においても量的に見出しにくい現状にあって、その仔細な位置づけはそのままに据え置かれている。

初期須恵器の直接かかえる問題は、朝鮮半島からの土器移入、窖窯技術の導入、従来の在地土器群のセットへの影響、土器の需給体制の変容、生産地の動向、生産基地と周囲への波及といった様々なものがある。こうした土器の直接的な課題は他項に委ねることとして、ここでは土器以外の要素と組み合わせることによって、初期須恵器の変化の過程がどのようにとらえることができるのかを論じたい。

その組み合わせの要素として、古墳墳丘に周る円筒埴輪の変化をとりあげたい。円筒埴輪の生産上の大きな画期は、黒斑の出現率が非常に少なくなる窖窯焼成への移行である。藤井寺・羽曳野市に所在する古市古墳群では、その変化の過程を明らかとすることができ³⁾、特に、応神陵古墳では大量の埴輪に形態、焼成、法量、調整の画一化がすこぶる強く表現されている。また、一方で、それより新しい段階で須恵器副葬が一般化し、須恵器そのものの大量需要とそれに伴う供給といった点で新たな局面をむかえる。

本稿では後者の問題をあつかわない。ここでは、特に前者の窖窯焼成の関連性とその前後で得られた円筒埴輪生産の推移と古墳供献される初期須恵器がどのようにかかわって変化するのか。そして、その変化は陶器窯跡群の初期須恵器の変化とどう対応するのかという比較を試みるものである。

2. 円筒埴輪と初期須恵器

古墳に伴う出土遺物は複数種におよぶことから、それぞれの型式組列の検討を行うことができるメリットがある。しかし、それらの遺物群は一つの時代相をつくり出していることから、単純には短時間の幅の中に置くことができないというデメリットをもっている。

古墳墳丘周囲に置かれる円筒埴輪は墳丘外装の最終段階に位置することから、墳丘完成時年代に近い。一方、土器は造営時の際の日常的な入り込みと埋葬時の際の供献、埋葬後の設置といった段階的な入り

4. 円筒埴輪による各段階

込みがある。ただし、それらを明らかにすることができるのであれば、日常性が強いものほど他の関係すなわち遺構との時間的、地域的関連性といったことがらの比較も容易なものとする。

問題となる初期須恵器については出土する古墳が限定されることから、他の副葬品と同様、古墳に持ち込まれるまでの時間差を考慮に入れる必要があるものもある。ここではそうした諸条件に留意しつつ埴輪の変化推移にもとづいて各古墳出土須恵器を配列し、傾向を読みとることに重点を置きたい。

3. 円筒埴輪の外表面調整の変化

円筒埴輪による時間的推移については、川西宏幸氏⁴⁾が提示したB種ヨコハケという埴輪の外表面2次調整について注目し、古市古墳群の大型墳を中心に細分を行ったことがある。このB種ヨコハケはちょうど窖窯焼成への変化過程と須恵器生産の初期的な段階とがかかわり合うことから、本論では非常に重要な要素である。

B種ヨコハケは4つに細分が可能であり、Ba、Bb、Bc、Bdと呼称し、その順に出現頻度によって漸移的に変化する。これは凸帯間を水平方向にハケを整えて充足する方法がシステム化される過程を内包している。その際、ハケ工具を器面からできるだけ離さず、確実に施すために垂直方向に特徴的な静止痕が残るというものである。

Ba種は静止痕の出現率が少なく、凸帯間を2周以上のハケ動作で充足しており、この種の出現頻度の高い古墳では須恵器を伴わずに、有黒斑の埴輪が多い。

Bb種は静止痕の出現率が高くなるが、凸帯間を2周以上のままである。ただし、ハケ工具の変化と最終的なハケ動作が一周で凸帯間を充足しようとする意図が見受けられ、新・旧に分けることができる。新しい要素の出現率が高い段階で、窖窯焼成の埴輪へと変化、須恵器の共伴例が見られるようになる。

Bc種は凸帯間を1周のハケ動作で充足するもので、須恵器との共伴が目立つようになる。この種の新しい須恵器共伴例としてはTK208～TK23型式のものがあり、典型的なB種ヨコハケのシステムと定型化した須恵器の形態と器種組成の一定の完成を見ることになる。出現頻度の高い大型古墳例を挙げると、堺市仁徳陵古墳、ニサンザイ古墳、藤井寺市允恭陵古墳などである。

Bd種はこの段階以降となることから、説明をはぶき、主に対象となる古墳はB種ヨコハケをもつ古墳のうちでも、Bb、Bc種ヨコハケの出現頻度が高いものということになる。そして、B種ヨコハケの実態が連続してよく把握できる大阪府、奈良県といった地域に限定して以下に概観する。

4. 円筒埴輪による各段階

Bb種ヨコハケを認めることのできる須恵器を出土する古墳には大阪市城山3号墳⁵⁾、豊中市御獅子塚古墳⁶⁾、大阪市長原45号、31号、29号、10号墳⁷⁾、柏原市玉手山遺跡⁸⁾のものがある。これらのうち、Bb種ヨコハケの中でも新しい要素（ハケ原体幅が広いもの）が確認できる古墳には長原10号墳、玉手山遺跡の古墳がある。次に、Bc種ヨコハケが認められる古墳には大東市堂山1号墳⁹⁾、奈良市ウワナベ古墳¹⁰⁾、藤井寺市野中古墳¹¹⁾、大阪市城山7号墳⁵⁾がある。

これらの古墳をB種ヨコハケにしたがって段階的にとらえると、Bb種の古いもの（第Ⅰ段階）。新しい段階のもの（第Ⅱ段階）。Bc種ヨコハケのもの（第Ⅲ段階）として、3つの段階に分けて考えることができる。

第Ⅰ段階

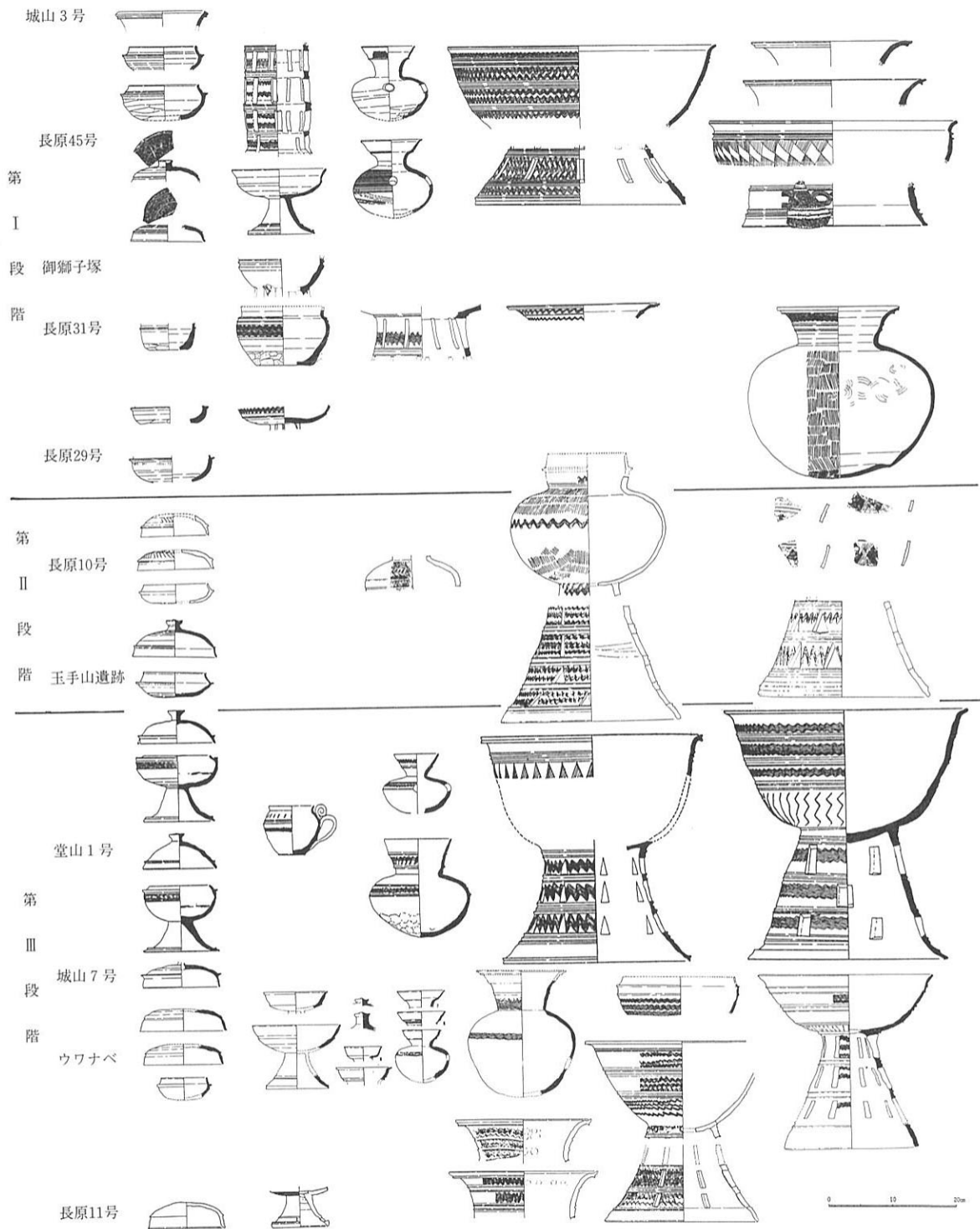


Fig. 487 埴輪による段階別 古墳出土須恵器編年表

須恵器を有する古墳を確認できる古い段階である。御獅子塚古墳例をのぞくと、いずれも小型墳であり、須恵器の群としても比較的まとまりの良いものである。したがって、埴輪との時間的な包括性は短いと考えてよい。

須恵器の量としては、御獅子塚古墳例を考えると数個体の数少ない出土が中心のようであり、今後この類の古墳出土例が増加するように考えられる。

その他はいずれも長原古墳群とその周辺のものであり、小型墳ゆえに資料が見出しやすいのかもしれない

4. 円筒埴輪による各段階

ないが、同様な中期の小型埴集合型の京都府木津町上ヶ平古埴群例¹²⁾と比較する時、長原古埴群の特質として評価できる。また、窖窯焼成の埴輪の採用も早く実現するといったことを考え合わせると、周辺に須恵器窯のあった可能性も十分に考えられる。

長原45号埴は群内でも器種にバラエティーがあり、坏、高坏、壺、器台、甕、甗と一定のセットがそろろう。坏は受け部が体部と一体的にとりつく。

体部は器壁の厚い平底状の底部から丸味のある体部へと続き、比較的長く外弯して内方に向かう口縁部がとりつく。底部から口縁部までは徐々に器壁が薄くなる。甗は口縁部が二重口縁状になっており、屈曲部が明瞭である。また、高坏の坏部上半部と同様に「く」の字気味に外弯しながら外方に開く。この傾向は甗口縁部や壺、甕、器台の口縁部にもうかがえる。文様には鋸歯文、組紐文があり、波状文は精密である。

31号埴の坏身は底部平底のもので、29号埴の坏身は下半の器壁が厚く体部に丸味をもつ。両者とも凸帯状の受け部を特徴とする。

第Ⅱ段階

この段階の古埴も小型埴であり、時間幅はあまりないと判断できる。前段階の坏に比べると蓋天井部と身底部は比較的器壁が均質となり、体部との境がスムーズに移行する。これは成形の基礎となる粘土円板の仕上げとケズリの方法の変化に対応するものであろう。

長原10号埴は坏蓋天井部に斜行状の刻み目がつくものがあり、口縁端部はそれまでのものと比べ、水平面を有するしっかりとしたものである。

玉手山遺跡は坏蓋のつまみが高いものであるが、その他の部分については定型化に向かう形状を感じさせる。ただし、坏身底部に平坦な部分を多く残し、蓋、身とも口縁端部付近で外方へ折れまがる。

第Ⅲ段階

この段階はウワナベ古埴のような大型古埴、野中古埴のような陪冢的古埴、堂山1号埴のような単独小型埴と様々である。また、後2者では搬入品の土器が多く、出土量も多い。

堂山1号埴の埴輪は焼きがあまり、黒斑がつくものもあり、従来古く考えられがちであったが、形状、成形、調整を考慮に入れてこの段階が妥当である。一方、共伴する土師器高坏は硬質に焼成され、胎土が均質で、器壁も厚く、脚内面の調整の粗雑さなどから、古くさかのぼらせる必要はない。特に高坏脚部は脚柱部が下方へ大きく開きながら、さらに屈曲して水平方向に大きく開く形状は須恵器の有蓋高坏と共通する。この形態と類似する高坏が讃良郡条里遺跡¹³⁾の自然河川などで出土しており、これより6世紀代にかけて、北河内地域独自の須恵器生産系譜が感じられる。甗は二重口縁状の口縁の段が明瞭でなく、体部は肩の張ったものとなっている。把手付鉢は全体に丸味をもった体部で底部が小さい。

城山7号埴の坏蓋はつまみが堂山1号埴、玉手山遺跡と同様に高いものであるが、平たい天井部から口縁部にかけての間は全体に丸味をおびる。

ウワナベ古埴の坏身には土釜状のものがあるが、体部下半が丸味をもち、ほとんど平底状部分をもたない。坏蓋は比較的大きく、天井部は丸味をもつものの全体に偏平な感じをうける。蓋は稜で屈曲し口縁部となるが、境は不明瞭で一体感がある。高坏坏部上半部や甗口縁部は内弯気味にたちあがり、器壁の厚さを増した後、すぼまり、端部を丸くおさめるか外方に向けて屈曲させ、つまみ出している。こうした特徴は比較的各器種に共通する。このため、甗なども二重口縁状ではあるが、段はさほど明瞭でない。

さて、野中古墳である。この古墳出土の陶質土器なり須恵器はバラエティーに富み、しかも坏が見られずに、特異な形状の器種が主である。そのため、相対的な須恵器の位置づけが堂山1号墳同様、困難である。しかし、埴輪はB c種が主体であり、この段階以前にはなり得ない。

特異な形状の器種は須恵質小型把手付壺や台付埴、有罍土器と報告されるものである。これらは朝鮮半島から直接渡来した可能性が強く、それらと分離が困難な焼成、胎土のものが鋸歯文や組紐文をもつものなどに認められる。こうしたものの他に、二重口縁状の壺と土師器ではあるが高坏や甕を認めることができる。

前者の壺は内弯気味でわずかに開く口縁部とその端部水平面を有して外方につまみ出す。この特徴はウワナベ古墳のものと類似する。後者の高坏は先の堂山1号墳の有蓋高坏を思わせるようなもので、高さのあるつまみを蓋天井部に付けるものと考えられる。甕は肩のはる体部を有するものである。また、頸部がしまり、口縁部が外弯しながら大きく開く須恵器の壺がある。これは口縁部外面に凸線文を巡らすもので、端部はにぶく丸くおさめられる。櫛描波状文を頸部に有する壺はその使用頻度が高く、報告書によると全器種の施文頻度が27.16%におよぶ中において、櫛描文施文の出現率は89%に達する。

これらのバラエティーのある土器群は出土状況によって二分できる。把手付壺の一群は内部の主体施設に一括副葬されており、他とは異なった意味をもっている。野中古墳の時期では須恵質の土器の副葬がまだ一般化されず、他の甲冑のような副葬品と一部同様なあつかいを受けていたのであり、把手付壺に関しては一定の保持、所有後の埋納を確実にできるものであろう。これに対して、二重口縁状の壺は日本化した須恵器のバリエーションの一つ、土師器は須恵器の影響を受けたものとして分離解釈が可能であり、比較的に築造時期に近い所産であると考えることができる。

以上、定型化以前の須恵器を伴う古墳出土土器を概観した。これに続いて長原11号墳⁷⁾、61号墳¹⁴⁾や藤井寺市青山2号墳¹⁵⁾、堺市伏尾遺跡¹⁶⁾などがある。それ以降は須恵器の古墳供献、副葬は爆発的に増加する。

5. 定型化前須恵器の新旧

主に古墳から出土する初期須恵器を概観してきた。これらのうち、野中古墳の土器群は多少の時間幅を見積る必要はあるが、分離して考えることができ、全搬に一定時期幅の土器一括群を有する古墳の須恵器であった。そして、埴輪による各段階によってその範囲の時間的な須恵器の形態変化の状況についていくらかの要素を抽出することが可能であった。

ここで得られる新旧は大きく第II段階中に起きている。ちょうど第II段階は応神陵古墳完成期頃であって、埴輪にとっても窖窯焼成、B種ヨコハケの盛行、形象埴輪の器種整理に伴う多用化といった大きな画期が各地で顕在化する段階である。この段階を前後して須恵器各器種の変化をまとめてみよう。

坏は体部成形の基礎となる粘土円板状にまきあげていく単位が第I段階では比較的に平坦でその割合が大きく、口縁部に向かってそこからのまきあげも極端に垂直方向である。ヘラケズリも不規則に底部（天井部）と体部の境に集中する。そのため、器壁の厚さは均質でなく、底部（天井部）ほど厚くなっている。第II段階ではその傾向は残るもののその境は不明瞭となり、均質化し、スムーズなものになっていく。したがって、第III段階の堂山1号墳の把手付埴やウワナベ古墳の土釜状の坏身の底部などは平底部分の割合が小さくなっている。

高坏坏部の上半部や二重口縁状の甕口縁部の上半部は第I段階の長原45号墳の高坏に代表されるよう

6. 陶邑窯跡群における初期須恵器の推移

に断面「く」の字状に折れまがるようにして大きく外反する。それに比べ第Ⅲ段階の堂山1号墳、ウツナベ古墳では逆に中位で肥厚、内弯気味であるとともに、上半、下半を分ける屈曲と稜は不明瞭となる。

甕、壺体部については第Ⅰ段階では肩のはるものとそうでないものがある。後者が比較的に主流であるが、第Ⅲ段階では肩のはるものが優位である。また同時に体部と頸部の屈曲が明瞭となる。

これらの他には、口縁端部に水平面をもち、ふんばったような感じになるものが第Ⅱ段階より顕著になる。また、蓋天井部に貼りつくつまみの高いものは第Ⅱ・Ⅲ段階に目立つ。文様は個体内での粗密がそれごとに異なりを見せるが、全体的な施文率は高くなっていくようである。そして、それにしたがって組紐文、鋸歯文がしだいに消失し、櫛描波状文を多用する。

以上のような変遷推移を考えることができるのであるが、これをもとに量の豊富な陶邑窯跡群の資料においても検討してみたい。

6. 陶邑窯跡群における初期須恵器の推移

大阪府南部にある陶邑窯跡群はこれまで多くの調査が実施され、須恵器編年が細かく組まれている。しかしながら、初期須恵器に該当する段階の新旧の変遷観はTK73号窯資料の解釈によって、若干異なっているのが現状であろう。

生産地遺跡の編年は時間的にも地域的にも安定した中で行うことのできる最も有効な土器編年の手段の一つである。しかしながら、時間的な共有性の最も高い同一床面資料とそこにある器種の豊富な資料を両立できる窯跡が結果的にはあまりめぐまれているとはいえない。そこで、窯資料は灰原資料を含めた編年とならざるを得ないため、一定の窯経営期間を見込むこととなる。その場合、期間の長短を考慮する必要性が生じ、資料を抽象形式化することになって様式的な区分範囲の型式群を認定することになったと言えよう。したがって、本来、窯間の資料比較を行いにくいという点に関しては窯経営期間の重複性を通じて新旧を確認できる利点があるものの、それがために型式間の区分を少なからず不明瞭なものにしている。

こうしたことから、先の埴輪によって得られた型式変遷観より、陶邑窯跡群から出土する窯資料を、再度窯相互が関連するように坏身を例として配列することを試みたのがFig.488である¹⁷⁾。

TK73号窯は窯体天井部の重なり度合いから大きく3度の補修が報告されている。比較的に長期間経営された窯である。坏身は細かく5つに分かれる。

A類は平底で体部がほぼ直立する。B類は平底の割合が少なくなり体部下半が丸味をおび、ヘラケズリの範囲がやや増える。C類はより体部下半に丸味があり、受け部が水平に突出する。TK73号窯ではこの3類が連続し、形態を異にして、F・G類がある。

TK85号窯は当初構築された窯と全く同じ地点にそれより後の時期に新たな窯が重複する。ここでは前者を見る。TK73号窯のC類と共通したものがある。D類はこれまでの口縁部たちあがり直線的に内傾していたのに比べ、外弯して内傾する。底部の平底状部分がさらに少なくなるが、TK85号窯のC・D類には底部と体部の境にヘラケズリをほとんど施さない小型のものもある。E類は受け部が凸帯状にとり付かず、D類より体部と一体化しており、口縁部は短く、ヘラケズリはシスティマチックなものとなる。

TK305号窯の窯体は大きく3度の作りかえがある。坏身は受け部が不明瞭であるものの、C類と類似した形状のものがあり、D類とも類似するものがある。E類は認められないが、F・G類がある。F

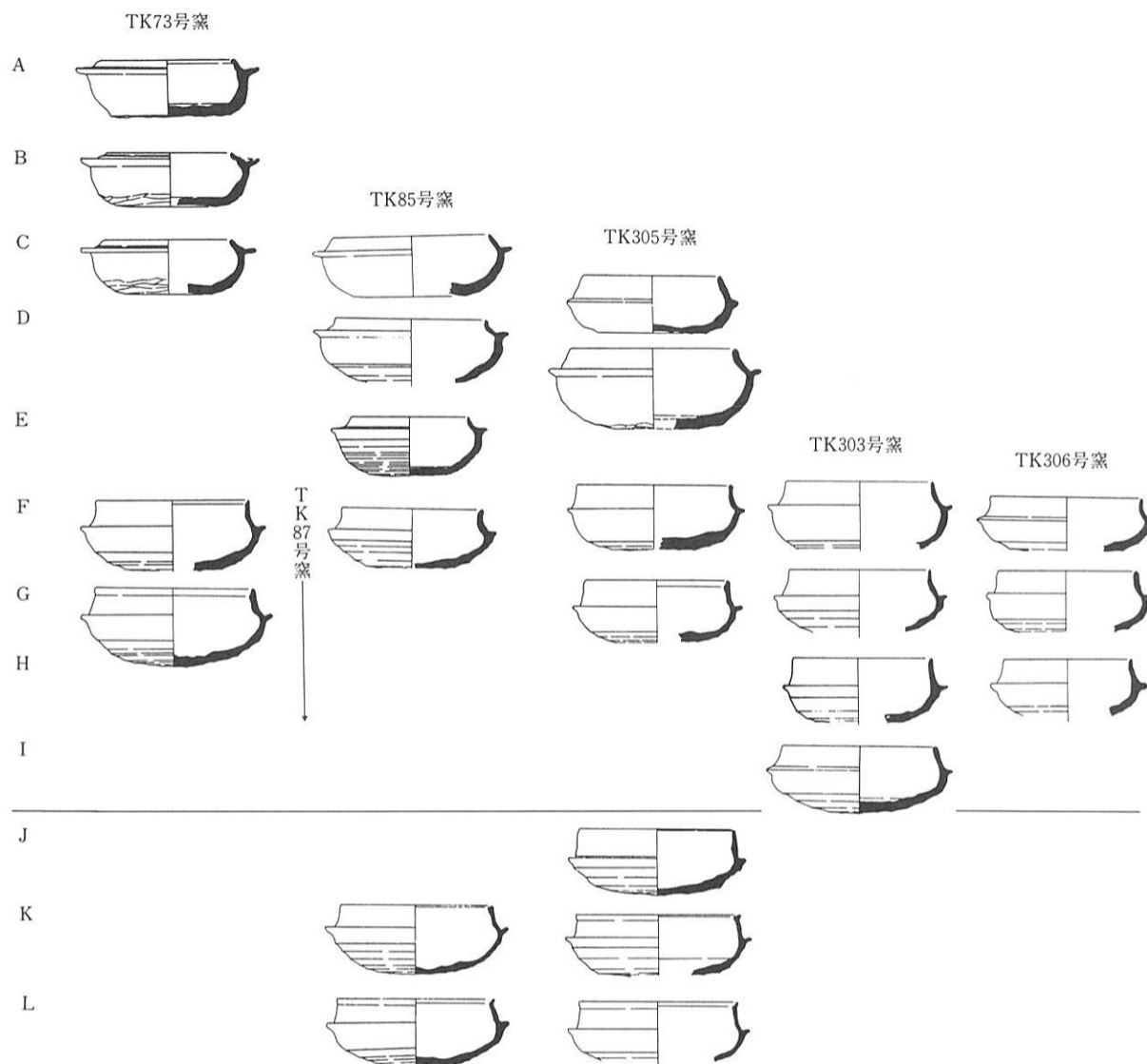


Fig.488 陶邑窯跡群 初期須恵器坏身変遷推移

類はそれまでの体部と底部が分離している形状に比べ一体的なつくりものであり、口縁部たちあがりは断面三日月状に内傾する。G類は口縁部たちあがり上半部が比較的垂直なものとなる。両者とも口縁部に水平面をもつ。TK305号窯は他にJ・K・L類の一群がある。

TK303・306号窯はTK303号窯が前庭部と灰原の資料、TK306号窯は上半部が削平をうけた資料であるが、比較的によくまとまった状況を示す。ただし、遺物出土量が多くなく、短期経営窯のあり方を示す。双方ともF・G類があり、それに続いて口縁たちあがり直線的に、しかも垂直方向気味になる。受け部はより水平方向になる。特にH・I類のうち、I類はその傾向が濃厚である。しかも、口縁端面はよりしっかりと逆にすればふんばるように水平面を呈する。

J類以降は定型化したものとしてとらえることができ、TK305号窯の新しい一群はそれをよく示している。C～I類までは全般に口縁端部が丸くおさめられるのに対して、J～L類は端面に凹線状のくぼみがいり、内外に拡張することが顕著である。また、受け部は下半が体部と一連となり厚くなるとともに上半が水平方向の面を呈するもののやや外上方斜めにつきでるようになる。体部の回転ヘラケズリはその範囲を増してスムーズに仕上げる。

7. 初期須恵器の変化のもつ意味

A～L類と坏身を細かく分け、変化の連続性を各窯の重複関係から見てきた。それらは漸移的に移行していくものとみて間違いなかろう。その中で、大きな変化がある。まずC類であり、次にF類、J類となり、4分類にまとめることが可能である。そのうち、初期須恵器にかかるのは前の3分類である。この分類でよく適合する窯経営の資料を挙げるなら、現在のところ最初にTK73号窯の古い一群、次にTK85号窯、そしてTK303・306号窯の一群が適当である。これらを仮に型式として認定する。坏だけでなく他の器種についても大きくはこれに追従しているのがわかる。

出現頻度の高い甕について見るなら、TK73(古)型式のものは頸部と体部の境が不明瞭、頸部が長く顕著な屈曲なしで外弯、口縁部は内外面を強くヨコナデし、端部側を尖らすようにする。端面はその後ヨコナデしないものが特徴的である。TK85型式のものは端部を丸くおさめるものが顕著であり、面をもつものが一部で見られ調整の最終が端部付近となる。TK303・306型式は口縁部付近で外方水平方向に屈曲し大きく開き、端部は面をもち、上下にわずかに拡張される。頸部と体部の屈曲は明瞭であり、肩のはる体部が多い。このような新旧の変化を両者に認めることができ、TK85型式は前後のバリエーションがある。

壺は二重口縁状のものに注目するとTK85型式を中心として展開し、新しい要素をもつTK305号窯は屈曲の段が不明瞭であるものが目立つ。

高坏はTK73(古)型式のものが上半部において外弯しながら大きく開く。TK85型式は前傾向をひきつぐものの直線的である。TK303・306型式の高坏脚部は裾で屈曲し外方に大きく開く。

これらの変化は先の埴輪による推移とおおむね一致するものであり、第I段階はTK85型式の範囲に、第II・III段階はTK303・306型式に対応する。

さて、埴輪にないTK73(古)型式の特徴をさらにみると、甕に見られる叩き目はTK73号窯の平行叩きが99.8%であるのに対してTK85号窯は91.4%であり、後者のバラエティーさを少なからず示している。文様の施文にもこの傾向はうかがえる。

7. 初期須恵器の変化のもつ意味

これまで、埴輪による新旧と初期須恵器の推移を照らし合わせてみた。その結果、古墳で出土する須恵器からはほとんど見出すことのできない形態のものがTK73号窯のものに認められた。その他のものはそれぞれの変化の様相に共通性があることからTK73号窯の一部は先行する形態であるにとらえた。

その際に抽出できたのはTK73(古)型式と仮に呼称するものであり、坏A・B類の平底のものが特徴的である。また、他に、墳墓供献土器との差を考慮に入れても甕のシンプルさが目につく。甕口頸部はほとんど装飾されることなく、平行叩きで統一され、内面スリケシといったものである。石神 怡氏¹⁸⁾が指摘する「須恵器が本来持っていた実用容器・・・須恵器の中で最もその特性を発揮できたものが甕・・・大甕の所有量こそステータスシンボルとして存在」したという甕の評価がある。この時期、甕の比率は高い。

須恵器生産開始段階でその経営にたずさわりの消費側がまず求めたものは大甕であり、それは加飾せずとも実用性とステータスシンボル性を両立させていたと考えられる。つまり、一部集団の非常に特定の要求とそれに呼応する特定の集団による生産体制がまず確立した。そうした要求の時点で生産される要求物はある意味で、すでに日本化を達成していたのであり、基本的には単純な器種と形態との構成であったといえる。そして、それに加えて特定集団による特定器種が個別に存在した。

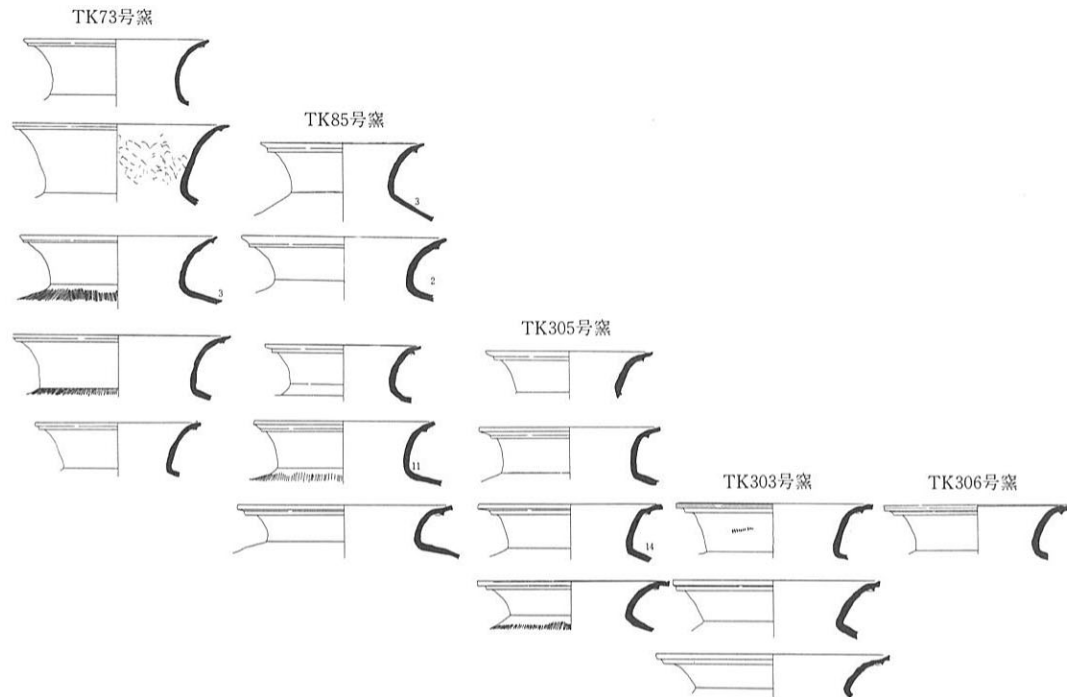


Fig.489 陶邑窯跡群 初期須恵器変遷推移

T K 85型式の段階ではかなりの集団の間で須恵器生産が地点を異にして展開したと考えられる。それは古墳供献が目につくことや埴輪生産がすでに窖窯焼成へと移行していること、二重口縁壺をはじめとした土師器を模した器種の増加、坏形状の独特な方向への変化といった事象である。こうしたバラエティーさは先の特定集団のみならず、一般労働力の大幅な参加と朝鮮半島内での地域を異にした集団の須恵器生産への参画などが主要因として考えられる。

後者の状況は古墳供献の土器によく示され、むしろ次のT K 303・306型式の段階に豊富である。たとえば伽耶系と考えられる長原10号墳や北野耕平¹⁹⁾、定森秀夫²⁰⁾が野中古墳で指摘する伽耶、百済系陶質土器と言ったものである。定型化以降の須恵器の一群に含まれる陶質土器系のものは比較的に分離しやすいが、対象とする段階では困難なものが多い。実際には時間、地域を異にして順次、渡来し定着、移動する様相があったと考えられ、そうした諸要素を明確に分離しにくい状況が初期須恵器のあり方そのものであったのであろう。しかし、それにしてもこのことは異なった集団がT K 85型式以降、須恵器生産に大幅に関与し、それぞれの地域で微妙に異なった生産系譜をつくり出していると考えられ、北河内の地域相の状況などはそれを端的に示すであろう。

にもかかわらず、須恵器生産が定型化に向かったのはなぜか。

多量の人々の生産関与は応神陵古墳築造前後の第Ⅰ・Ⅱ段階であり、少なからず、大古墳築造のための労働力の集中のあり方と無関係でなく重複性をもっている。そうした労働力の管理システムの制御、すなわち強固な統合性は須恵器生産とも軌を一にした。T K 303・306型式を通じて坏の大量生産・規格化、大型器台の生産などが明確に志向され、完成するのである。最も墳墓に投下させる労働力の集中を示した仁徳陵古墳の築造はそうした時期前後の第Ⅲ段階に位置する。そしてまた、全体的にも坏を主体とした生活様式へとも変換していく。さらに須恵器の形態と組成を質量とも広範囲に確固たるものにした段階、それはニサンザイ・允恭陵古墳の築造のころであった。

陶邑窯跡群はそうした人的集中期の充実性を背景とし、パネとし、その過程を通じて、一大生産地と

7. 初期須恵器の変化のもつ意味

して固定化・大規模化されていくものと考えられる。

その発端としての基地が大庭寺遺跡²¹⁾の他に求められ、小阪遺跡は労働力拡大期にあたるTK85型式の段階から、おそらくは渡来系、在来系が融合した状況下の新たな生産基地の一つとして展開したと考えられる。

本稿を成すにあたっては、北野耕平、都出比呂志、福永伸哉、萩本 勝、中井貞夫、杉原和雄、柳本照男、服部聡志、田中清美、森屋美佐子、菱田哲朗、高橋克壽の諸先生、諸嬢、諸氏をはじめとする多くの方々の御指導、御援助を賜った。

註

- 1) (財)大阪府埋蔵文化財協会 1991 「大庭寺遺跡出土須恵器検討会」資料
大阪府教育委員会・(財)大阪府埋蔵文化財協会 1990 「大庭寺遺跡(その5)発掘調査」現地説明会資料28
- 2) 大阪府教育委員会 1978 『陶邑』Ⅲ 「大阪府文化財調査報告書」第30輯他
平安学園考古学クラブ 1966 『陶邑古窯址群』Ⅰ
- 3) 大阪府教育委員会 1988 『大木川改修にともなう発掘調査概要』Ⅴ
- 4) 川西宏幸 1978 「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号
- 5) 大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1986 『城山』(その1)
- 6) 豊中市教育委員会 1990 『御獅子塚古墳』
埋蔵文化財研究会 1989 『古墳時代前半期の古墳出土土器の検討』第Ⅱ分冊 第25回
- 7) 長原古墳群は以下の文献に拠るが、古墳番号・実測図については註6)の埋蔵文化財研究会のものにしたがった。
45号墳：(財)大阪市文化財協会 1989 『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅰ
31・29号墳：(財)大阪市文化財協会・長原遺跡調査会 1982 『長原遺跡発掘調査報告』
10号墳：大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1978 『長原』
- 8) 柏原市教育委員会 1983 『柏原市埋蔵文化財発掘調査概報 1982年度』
- 9) 大阪府教育委員会 1973 『堂山古墳群発掘調査概要』
大阪府教育委員会 1978 『陶邑』Ⅲ 大阪府文化財調査報告書 第30輯
- 10) 奈良県立橿原考古学研究所編 1976 「ウツナベ古墳」『奈良県文化財調査報告書』第28集
関川尚功 1984 「奈良県下での初期須恵器」『考古学論攷』第10冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 11) 大阪大学 1976 『河内野中古墳の研究』大阪大学文学部国史研究室研究報告第2冊
- 12) (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1989 「木津地区所在遺跡、上人ヶ平遺跡」『京都府遺跡調査概報』第32・35冊
- 13) 大阪府教育委員会 1991 『讃良郡条里遺跡発掘調査概要』Ⅱ
- 14) (財)大阪市文化財協会 1990 『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅱ
- 15) 一瀬和夫 1992 「古市古墳群における大型古墳群の埴輪の変遷」『埋蔵文化財研究会15周年記念論文集』
- 16) 大阪府教育委員会・(財)大阪府埋蔵文化財協会 1990 『陶邑・伏尾遺跡 A地区』
- 17) この推移はすでに石神怡氏が明確に論じている。(財)大阪文化財センター 1984 『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書』Ⅰ P.795
- 18) P.791 註17)と同じ。
- 19) 北野耕平 1969 「初期須恵質土器の系譜—紀伊六十谷出土の土器とその時代—」『神戸商船大学紀要第一類文科論集』17
- 20) 定森秀夫 1990 「日本出土陶質土器の原郷」『季刊考古学』第33号
- 21) 大庭寺遺跡の須恵器は上述の変遷観からTK73型式以前には今のところさかのぼらない。